

水俣学通信

創刊号
2005.7.1

News from the Open Research Center for Minamata Studies



百間排水口-1973年 (写真提供：原田正純)

目次

水俣学研究センター開設によせて	2
水俣学研究センターが目指すもの	2
熊本学園大学ルネッサンスと水俣学	3
水俣学研究センターの歩み	3
水俣学研究センターの紹介	4
2005年4～5月活動・調査報告	5
今後の活動予定	8

水俣学研究センター開設に寄せて

社会福祉学部 教授 原田 正純



水俣病正式発見50周年めを迎えようとする時に熊本学園大学水俣学研究センターが開設できることは私にとって夢のように嬉しいことで、水俣病事件史の中でも画期的なことと考えます。この開設に協力くださった関係者のみなさまに心から感謝します。

水俣病は大変不幸な事件であることには違いありません。しかし、環境汚染と食物連鎖による中毒や胎児性水俣病の発生は人類が初めて経験した事件であり、その後、世界の環境政策ばかりでなくさまざまな分野に計り知れない影響を与えました。その意味ではまさに人類の「負の遺産」です。胎児性患者のとも子さんの両親が重症の彼女を「宝子」と呼んで慈しまれたように、水俣病はまさに「人類の宝」です。その「宝」を私たちの社会はこの50年間に「宝」に相応しく、大切に扱ってきたのでしょうか。行政も研究者も被害者を大切にしてきたのでしょうか。重症な患者さんはもちろん被害者ですが、水俣病の被害は単に目に見えるものだけではありません。不知火海一帯の多くの住民が有症、無症にかかわらずさまざまな被害を蒙ったのです。理不尽な差別に泣かされたり、経済的な大きな不利益を負わされたり、伝統的な文化や生活様式、そして人の心まで傷つけられ壊されたりしてきたのです。

水俣病事件で研究者は原因や実態の解明や被害者救

済の一部は貢献してきたかもしれませんが、しかし、膨大な被害に対してしてきたことはわずかでありませんでした。このセンターの出発点はその反省にあります。事件の全体像(実態)の解明や本質に迫る研究はやっと始まったばかりです。水俣病は終わっていません。水俣病事件はきわめて社会的、政治的事件であったのに、それを狭く医学だけの問題に閉じ込めたことが一つの不幸でした。したがって、水俣学研究センターは学際的な研究を目指します。専門分野や機関を超え、専門家と市民(非専門家)の枠も超えたバリアフリーの参加型のセンターを目指します。センターは水俣病のことばかりを研究するものではありません。地元役に立つ、地元で還元できる幅広い研究を目指します。センターは誰にでも(国際的にも)開かれた、新しいスタイルの研究・教育の拠点にしたいと考えています。その研究や教育が教訓として後世に活かされ、被害者の心が少しは癒され、水俣の町が再生できた時に日本で他に類のない、世界でもオンリーワンの研究センターは完成するのです。

このような理念で開かれたこのセンターがその理想を達成するためには多くの方々のご協力、ご支援が必要です。どうぞみなさまも参加していただき、お力添えください。

水俣学研究センターが目指すもの

社会福祉学部 教授 花田 昌宣



熊本学園大学では、これまで6年間にわたり水俣学研究プロジェクトとして教育・研究・調査活動を進めてきましたが、本年度より文部科学省の高度学術研究教育拠点としてのオープンリサーチセンターの選定を受け、研究員20名、リサーチアシスタント2名、事務職員1名をもって新たな体制を構築しました。本年8月には現地センターもオープンします。

私たちが目指す水俣学の根本は「負の遺産としての公害：水俣病事件を将来に活かす」というところにあります。公害は科学技術の発展に伴って起こった地域社会や文化に対する負の遺産であったから歴史的にその相互関係を明らかにし、将来の開発と福祉ならびに

地域社会のありようについて考察したいというのが基本的な願いで、そのために、これまでの研究の経験をふまえて、複数のプロジェクトが進められていきます。

第一は、水俣病被害とは一体何であったのかを現地の実情に即して調査し課題と展望を示したいと考えています。たんに病気の側面だけではなく、生活面や地域社会の疲弊、産業への影響なども視野に入れ総合的に研究していきます。

第二は、現地を中心に行政、企業、被害者団体、地域経済団体、市民、チッソ労働者、労働組合などとの協働により調査の実施のみならず、政策提言につながるプラットフォーム構築を模索していきます。

第三に水俣病および水俣における資料の収集と公開を進めて、資料センターとしての役割を果たしていきたいと考えています。

第四に大学の学部教育ならびに大学院教育と連動して地域に活躍する人材、将来の研究を担う人材の育成を進めたいと考えています。

さらに、学問的な成果を地域に還元し貢献していくために、地域の方々と連携して、公開講座、医療相談や福祉相談などを徐々に実施していきたいと考えています。また、水俣には国内外から沢山の研究者や学生が訪れています。国内外での研究者の他大学の学生や大学院生の現地研修の受け入れも積極的に取り組みたいと考えています。くわえて、水銀汚染・水俣病被害を経験しているカナダなどへの訪問調査、アジアにおける環境汚染と被害に関する現地調査や研究者・被害者との交流を実施し国際的視点からの水俣学の発展を目指し、国際的な発信を進めていきたいと考えています。

これらの事業は、水俣学センターの研究員だけでできることではなく、熊本学園大学の教員や学生、地域の方々との協力によってこそ可能になります。このようなオープンな学を構築する場として、水俣学研究センターが構想されているのです。

水俣学研究センターの歩み

- 1998 産業経営研究所40周年研究プロジェクトに参加：チッソの財務研究（酒巻政章、花田昌宣）、水俣市民意識研究（大野哲夫、土井文博、羽江忠彦）
- 1999. 2 シンポジウム「水俣の問いと可能性—『水俣学』への構想力を求めて」熊本学園大学社会関係学会および社会福祉研究所共催。パネラーに富樫貞夫、羽江忠彦、原田正純、司会花田昌宣。
- 8 水俣学研究打ち合わせ第一回会合
- 10 水俣学研究プロジェクト「和解後の水俣地域市民社会の再生に関する総合的研究、水俣学の確立へ向けて」トヨタ財団より助成決定（参加研究者9名）
- 11 水俣学研究プロジェクト第一回研究会
- 2000. 1 水俣病事件研究会（大阪市大）にて研究発表
 - 1 西淀川大気汚染地区調査（7名参加）
 - 3 水俣現地調査（聞き取り、水俣市役所、おれんじ館、患者など）
 - 4 社会福祉学部福祉環境学科（定員100名）開設、水俣学習の開始。
 - 8 富山・新潟現地調査
- 2001. 1 水俣病事件研究会（熊本学園大学）で研究発表
 - 1 熊本県芦北振興局・環境学習の拠点づくり事業に学生参加
- 2002. 1 水俣病事件研究会（熊本学園大学）で研究発表

熊本学園大学ルネッサンスと水俣学

熊本学園大学学長

坂本 正



「坂本君、僕は水俣学がしたい。」原田正純教授が本学に赴任されるにあたって、できれば……というニュアンスで述べられた希望がこれであった。こうして、ささやかに始まった水俣学構想が熊本学園大学で着実に成果をあげ、いよいよ待望の水俣学研究センターが立ち上がることになった。地域に根ざした国際的な研究プロジェクトの推進という大きな課題がこれから具体化される。素晴らしいことだ。

21世紀は環境の世紀。水俣病事件は環境問題の原点である。熊本学園大学は地元の大学として水俣病事件に向き合い、学術的に取り組んでゆく使命があると考えている。原田正純教授を中心に進められてきた「水俣学」研究は、全国から注目を浴び、研究成果として2冊の書物、『水俣学講義』『水俣学研究序説』が刊行されているが、その一冊である『水俣学講義』は熊日出版文化賞を受賞している。「水俣学」研究プロジェクトは、水俣の地域に根を張り、研究、調査、教育を進めていくことになるが、そのためには水俣での研究拠点が必要になる。水俣市議会から熊本学園大学にサテライト教室誘致の決議をいただいた経緯もあり、研究拠点の整備が課題であった。

この課題が、水俣学の現地研究センターの設立で実現の運びとなる。大変喜ばしいことだと思っている。

本学の教育理念である「学生が主役」「国際規格の職業人の育成」「地域に存在感のある大学づくり」を3つの柱に、本学の新しい伝統と価値の創造を目指すのが本学が2005年4月から掲げている「熊本学園大学ルネッサンス」である。

その中で、高度学術研究支援センターを設立し、「水俣学」研究プロジェクトを高度学術プロジェクトの柱のひとつに据えている。「水俣学」研究でCOEに二度エントリーし、採択されなかったが、オープン・リサーチ・センター整備事業に採択され、社会的評価が確立した。本学は地域において、政策課題を具体的に実践し、実現していくことを伝統としている。地域に人材を還元する大学として、熊本学園大学は地域貢献ナンバーワンであるが、またひとつ進化をとげた国際レベルでの地域貢献ナンバーワンを目指したい。

- 2002.10 「水俣学」講義開始：社会福祉学部福祉環境学科（受講生100名余り）
- 11 第二期水俣学プロジェクト（トヨタ財団助成）の開始（参加研究者12名）
2003. 1 水俣病事件研究会（水俣市）で研究発表
- 8 水俣現地調査（芦北、津奈木の聞き取りなど）
- 9 「水俣学」講義開始：社会福祉学部福祉環境学科
- 10 水俣市議会：熊本学園大学サテライト教室誘致決議
2004. 1 水俣病事件研究会（新潟青陵大）で研究発表
- 3 日中環境被害救済国際シンポジウム
- 8 水俣現地調査（女島、津奈木、長島、茂道での聞き取

- り、保健所インタビューなど）
- 8～9 カナダ先住民居留地における調査（6名参加）
2005. 1 水俣病事件研究会（御所浦）で研究発表
- 3 大学院生研究計画、高木仁三郎財団より研究助成決定
- 3 水俣学研究プロジェクト、文部科学省オープンリサーチセンターに選定
- 4 大学院社会福祉学研究科修士課程福祉環境学専攻開設
- 4 水俣学研究センター（本学）開設
- 8 水俣学現地研究センター開設

水俣学研究センターの紹介

水俣学研究センター（本学）

本学内、本館5階に事務室とセミナールーム、7号館3階に、資料室およびセミナールームをおいている。現在、設備、備品類を整備しているところで、事務室にはスタッフ2人が常駐しており、水俣病関連、環境問題関連の書籍、逐次刊行物、資料が置いてあり、閲覧が出来る。貸し出しは現段階では行っていない。

また大学院生、学生が利用できる調査研究用の機器類も整備中で一定の手続きを経て研究に活用できるようになる。

7号館の資料室には、主に水俣病研究会の資料を収集している。これは水俣病第一次訴訟から現在に至るまでの第一級の資料である。

本館5階の資料室には、水俣病訴訟の福田弁護士が所蔵していた水俣病第一次訴訟から第三次訴訟などの裁判資料と、熊本商科大学の土肥先生が所蔵していた資料を現在整理している。熊本県や環境省の情報公開で入手した水俣病関連行政資料を保管している。

水俣学現地研究センター

8月8日水俣学現地センターがオープン予定となっている。場所は水俣市浜町、旧若草保育園跡を水俣市から借り上げ、現在内装改修工事中である。

現地センター開所後は、新日本窒素労働組合資料の閲覧や、研究者、水俣病研究現地調査拠点、水俣病被害者、水俣市民の福祉的相談援助の場となっていく。

また水俣現地の方々と協力して、水俣病被害者の日記、手紙、ビラ、チラシ、写真など各家庭にある



水俣学現地研究センター（2005.4）

水俣病に関連する資料を収集、整理、保存していくとともに、研究に活用していきたい。水俣学研究は水俣病だけの問題ではなく社会全体の問題であるので、水俣の労働、医療、福祉など幅広い視点で資料収集、整理をしていく。

■ 構成員

- | | |
|-------|--------------------------|
| センター長 | 原田 正純 |
| 運営委員会 | 原田正純、富樫貞夫、羽江忠彦、花田昌宣、宮北隆志 |

■ 研究員（50音順、2005年6月現在）

赤星香代子（精神保健福祉学）、天田城介（老年社会学）、大野哲夫（社会心理学）、河野正輝（社会保障法）、酒巻政章（会計学）、下地明友（精神医学）、高林秀明（地域福祉）、富樫貞夫（環境法）、豊田直二（生物学）、中村俊也（社会福祉実践論）、萩原修子（文化人類学）、花田昌宣（社会政策）、羽江忠彦（社会学）、原田正純（環境医学）、堀正嗣（障害学）、宮北隆志（生活環境学）、守弘仁志（社会情報学）、山本尚友（部落解放論）、和田要（社会福祉学）、小野達也（地域福祉論、大阪府立大学）、リサーチアシスタント：田尻雅美、事務職員：吉崎久美子

2005年5月1日

水俣フォーラム in 名古屋

社会福祉学部 教授 富樫 貞夫



5月1日、名古屋で水俣病記念講演会（水俣フォーラム／中京新聞社主催）が開かれ、私も「水俣からの問い」と題して講演した。水俣病事件は、その発生確認からまもなく50年目を迎える。それは被害者の補償・救済を中心に推移した50年であり、それすらもまだまだ終わっていない。地球上に広がる水銀汚染の現実をみると、これが目下最大の問題であるとは思わない。低濃度メチル水銀暴露の健康影響の問題を含めてまだ解明されていない重要な問題は多い。しかし、50周年を区切りとして事件の風化は一層進むに違いない。そうした中でこの事件を記憶しつづけるのは容易ではないし、それには強固な「持続する意志」が必要だ。いま私たちに求められているのは、日本の伝統的な思想風土に抗ってでも、1人びとりが水俣病50年の歴史と向

き合い、それを内面化し思想化することではないかと思う。その点で、ナチによるホロコーストの経験は大変参考になる。



2005年4月30日

水俣病事件を考える集い

社会福祉学部 教授 花田 昌宣

さる4月30日、水俣市公民館で「水俣病事件を考える集い」が、患者団体や支援者団体などで行う実行委主催で開かれ、患者家族や水俣病関西訴訟判決後の新たな患者認定申請者ら約百人が参加し、本学からも研究メンバーや大学院生6名ほどが参加した。

関西訴訟弁護団の田中弁護士から最高裁判決の意義について報告がなされた後、水俣協立病院の高岡滋医師が、約460人の認定申請希望者の症状データを発表。手足先や全身に感覚障害がある人が9割に上ることなどを挙げ、「9割以上が総合対策医療事業の対象者に相当する。患者認定の基準を満たす人も4～5割いる」と報告した。それを受けて、私の方から「環境省対策案の問題点と今求められているもの：社会福祉の視点から」と題して報告した。判決以降の状況について鳥瞰した後、社会福祉とは一人ひとりの権利を擁護することが原点であり、その意味で水俣病患者に福祉があったのだろうかとの問題提起をした。その上で、汚染地域住民を対象に「住民健康手帳」を発行し、健康不安の解消のみならず、住民主体の解決への道を歩むことが可能ではないかと提起した。

昨年10月の最高裁判決以降、新たな認定申請者が急増し、現在では2,000名を越えている。水俣病事件は、何度も何度も「解決した」とされ、「終わった」はずであった。現在の事態はそれが虚構の言説に過ぎなかったことを示している。私は被害の実相がわかっていないのに全面的解決などと軽々しく言うべきではなく、被害者の声に耳をかたむけ続けることが肝要なのだと考えている。



水俣訪問記

社会福祉学部 助教授 高林 秀明



6月上旬、水俣市役所で資料を探した後、市社会福祉協議会、共同作業所「ほっとほうす」で、お話をうかがった。熊本でくらしはじめて2ヶ月あまり。本で読んでいただけの「水俣」を少しでも身近に感じたい、自分なりの接点を何か見出したいという思いで足を運んだ。

水俣市は26の行政区にわかれている。それぞれに地域性があり、とくに市の都市計画課では住民とともに行政区単位のまちづくりをすすめているようだ。社会福祉協議会は、さらに小さな組単位の取り組みに力を入れていることを知った。それは「水俣方式」と呼ばれている。一方、水俣で暮らす障害のある人たちからみると、地域づくりにさまざまな課題があることもわ

かった。

50年間、国によって放置されてきた水俣病問題。地域では「もやい直し」の名でまちづくりが行われている。そこにかかわらせていただく上で、私がやらなければならないことは、誰もが安心して暮らせるまちづくりの上での「生活問題の地域性」を具体的かつトータルにつかむことだと思っている。といっても地域生活問題の調査・研究の途上にあって理論枠組みや仮説に明確なものがあるわけではない。不安はあるが、これまでの研究成果に学び、そして何よりも水俣の地、そこでくらす人たちに学びながら、これから少しずつ考えていくほかない。

福祉環境学入門水俣現地研修

日程：5月20～21日

参加者：福祉環境学入門履修学生129人、教員12名、
大学院生6名、水俣学研究センター2名、
TA2名

2000年度社会福祉学部に福祉環境学科の開設とともに福祉環境学入門という授業を開設し、毎年、水俣現地研修を実施している。第1回目は日帰り研修であったが、第2回目以降1泊2日の研修となった。今年度からは水俣学研究センターがコーディネートなどを行

うこととなった。

福祉環境学入門講義で、水俣病事件、水俣学入門、水俣病と福祉環境について学び現地研修に向かった。現地研修1日目は「企業組合エコネットみなまた」「水俣教育旅行プランニング」の訪問とヒアリング、「水俣病センター相思社・歴史考証館」で水俣病事件の歴史について学習、水俣病多発地区の漁村散策をゼミ単位で行った。昼食の後水俣市南部もやい直しセンターおれんじ館で水俣病被害者の上村好男さんから話を聞いた。夜は湯の鶴温泉そばの中学校体育館で水俣病被害者、杉本栄子さんの話を聞いた後、水俣の漁師杉本肇さんらの指導のもと「水俣ハイヤ節」を踊りほっとほうすの胎児性水俣病患者たちとともに楽しんだ。2日目はあいにくの雨であったが、チッソ水俣工場廃水が流されていた「百間排水口」、水俣市立水俣病資料館見学を行った。これらの現地研修の成果は、ゼミ単位で作成する報告書としてまとめられHPに掲載予定。

水俣学プロジェクトから研究に参加している大学院生2名がティーチングアシスタントとして参加し、案内人として活躍したことは、水俣学を進めてきた大きな成果だと言える。

(田尻 雅美)



2005年4月29日～5月6日

台湾・インドネシア報告

社会福祉学部 教授 原田 正純

「水俣病」のインドネシア語出版記念講演と研究交流、現地調査のため、台湾とインドネシアを訪問した。

台南の安顺事件は工場跡地の汚染問題であり、Minahasa Buyat Bay 事件は金精錬工場（アメリカ資本）の廃水による汚染問題であって、いずれも最初、水銀汚染が問題になって水俣病が疑われた。しかし、水俣病が否定されると（国立水俣病総合研究センターも関与）汚染企業（インドネシアでは New Mont 社）は「公害はなかった」と主張して、住民と対立し社会的・政治的問題に発展している。両者とも行政の立場が不明確だが有効な対策はしていない。

いずれも複合汚染であると考えられる。現在、前者

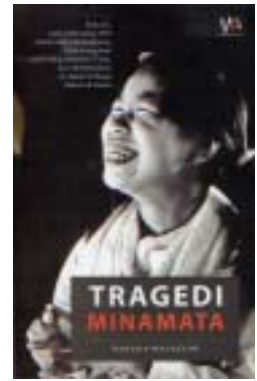


はダイオキシンとの関係が後者はヒ素との関係が有力視されてきている。確かにデータの的には水銀もダイオキシンもヒ素も確認されており汚染は存在するが、汚染の程度から言っても、症状から言っても、いずれも一つだけで説明できる程明確ではない。それぞれ、安顺病とかブヤット病とすべき新しい病像を示しているのかも知れない。そのことを理解してもらうためには今回の私の講演と意見交換は有意義であったと思う。

行政も原因や因果関係が明らかでないことで対策が遅れており、被害者や住民の不安とイライラが高まってきている。「汚染があると言われて久しくなるのに何もされていない。調査、調査と言っているが住民には何も分からないし、何の利益もない。症状は悪化するばかりだし、経済的にも苦しい」と言っていた住民の声に耳を傾けるべきである。

いずれにしても多くの患者が現在、困窮しているのであり、その対策は急がれる。

水俣病ではないがその発生の構造や行政や企業の対応、医学者の対応、被害者の状況や動きなどに水俣病と共通するものがある。水俣病の教訓が活かされているとは言えない。その意味では水俣には問題の指摘や対策に対する助言できる条件がある。



御所浦調査報告

調査日程：4月2～3日

調査地：御所浦町

調査参加者：水俣学研究センター〔原田正純、下地明友、花田昌宣、田尻雅美、荒木千史、永野いつ香〕

水俣病センター相思社〔弘津、高嶋〕

4月2日13時より17時30分で検診者23名、4月3日9時より11時30分で検診者11名、計34名であった。検診と聞き取り調査を行った。80%が初めて申請する人であった。

原田は、結果について検診者の70%に感覚障害がみ



られ、先の医療手帳受給者に一致し、10～20%の人は現在の水俣病の認定基準でも条件を満たしていると報告した。検診を受診した34名は認定申請を行う予定である。その後も御所浦から受診は続いて100名を越えた。

（田尻 雅美）

水俣学現地研究センター 開所記念行事

日 時：8月8日(月)

●13:00～15:00 建物開放・自由見学会

会場：水俣学現地研究センター

住所：水俣市浜町2-7-13

●15:00～15:25 記念式典

会場：水俣市公民館

住所：水俣市浜町2-10-26 電話：0966-63-8402

●15:30～16:30

記念講演「水俣再生への道」

谷川 健一氏 (日本地名研究所 所長、水俣市出身)

会場：水俣市公民館

●17:00～19:00 祝賀会

会場：総合婚礼会館あらせ 住所：水俣市栄町2-2-7

□ 今後の活動予定 □

9月20日

水俣学研究センター研究会

10月以降

第3土曜 定例研究会

第22回 天草環境会議

テーマ 「子どもらへつなく

水俣病50年の軌跡 in 天草」

主 催：天草環境会議実行委員会

共 催：熊本学園大学水俣学研究センター

日 時：2005年7月9日(土) 13：00より

場 所：天草郡苓北町志岐集会所

プログラム(案)

1. 「なぜ、今天草で水俣病か」
熊本学園大学：原田正純
2. 「関西訴訟最高裁判決を受けて」
関西訴訟弁護団：小野田学
熊本学園大学：富樫貞夫
3. 「不知火海の水銀汚染について」
水俣病研究会：宮澤信雄
4. 「溝口訴訟」 溝口訴訟を支える会：高倉史郎
5. 「新申請患者について」 水俣協立病院：高岡滋
6. 「人権救済申し立てについて」 出水の会：尾上利夫
7. 「カナダ水俣病」

立命館アジア太平洋大学客員教授：アン・マクドナルド

夕方～ 星空野外パーティ (町民の会事務局)

参加申し込み：水俣学研究センター



7月19日 水俣学研究センター研究員会議

8月6～8日 大学院福祉環境学フィールドワークⅠ・
水俣現地研修

8月6～12日 水俣学研究員水俣現地調査

9月9～12日 大学院福祉環境学フィールドワークⅡ・
瀬戸内海(豊島、上勝町)

水俣学関係図書



原田正純・花田昌宣編著

『水俣学研究序説』

藤原書店

2004年3月



原田正純編著

『水俣学講義』

日本評論社

2004年3月

第26回熊日出版文化賞受賞

編集後記

水俣学研究センターが4月に大学に設置され、あっという間に6月。なれない仕事とそれまでとは違う仕事内容に追われ、周囲の方々に迷惑をかけ続けている。6月初旬のある日、教授陣の多くが出張などで静かな一日が突然出現した。よおし！ニュースレターを作成するぞと意気込み、大学内の各研究所、他大学のニュースレターを参考にした。どこも素晴らしいものばかり。負けてなるものかと作り始め気分を盛り上げるために、形だけはニュースレターに近いものとなり浮かれていた。しかし、何事にもプロはいる。餅は餅屋。いずれ、その技も盗みます。(M・T)

水俣学通信

創刊号 2005.7.1

編集／熊本学園大学水俣学研究センター 発行人／原田 正純
 連絡先／〒862-8680 熊本市大江2-5-1 熊本学園大学水俣学研究センター
 Tel: 096-364-5161(内線1581) Fax: 096-372-0702
 http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/ E-mail:minamata@kumagaku.ac.jp
 印刷／ホープ印刷株式会社